人間研究　第 59 号　2023

保育内容総論における模擬保育からの学び

中　村　三緒子*

Learning from Mock Childcare Practice in Introduction to Child Care and Education

Mioko Nakamura

1．はじめに

平成 27 年（2017）12 月、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において、これからの時代の教員に求められる資質能力として（1）教員として不易される資質能力、（2）新たな課題に対応できる力、（3）組織的・協同的に諸問題を解決する力の 3 つの視点を明らかにして、教員の養成、採用・研修を通じた取り組みが提案された。

平成 28（2016）年 11 月に、大学等の創意工夫により質の高い教職課程を編成するできるようにするため、教育職員免許法の一部改正が行われ、新たな学校教育の課題へ対応できるよう、教育職員免許法施行規則の一部が改正された。新しい教育課程に沿って各大学等において教職課程の編成のための「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が設置され、大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針（教職課程コアカリキュラム）の検討が進められ、平成 29（2017）年 10 月には教職課程コアカリキュラムが策定された [(1)]。

これまでの教職課程における「教科に関する科目」と「教職に関する科目」との連携が十分とはいえないという課題に対して、教育職員免許法施行規則改正によって科目区分の大括り化が行われ、これまでの「保育内容の指導法」は小学校教育以降の「各教科の指導法」とは異なることから「領域及び保育内容指導法に関する科目」という科目区分の中の事項として「保育内容の新指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」となり、教職課程コアカリキュラムが作成された [(2)]。新しい教職課程では「教科に関する科目」と「教職に関する科目」等に分かれている科目区分を教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」となり、幼稚園の場合、「領域及び保育内容の指導法」に関する科目が創設された。幼児期の学校教育を実践していく専門家としての幼稚園教諭に求められる資質能力は、平成 30 年度実施「幼稚園教育要領」に示す 5 領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等を実践力の 2 つの側面から見ていく必要から、新しい教職課程では幼稚園教諭免許状において、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設された。

教職課程コアカリキュラムが策定され、教職課程の各事項について、「全体目標」、「一般目標」、「到達目標」として表され、教職課程における教育内容についても規定された。

幼稚園教諭養成課程における保育内容の指導法に関する科目において、全体目標として「幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された当該領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を

＊　白鴎大学

想 定して保育を構想する方法を身に付ける」ことが示された。また、到達目標の一つとして、「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」という模擬保育を取り入れた授業方法についても具体的に示された[3]。

２．保育内容の指導法「保育内容総論」

２．１　保育内容の指導法モデルカリキュラム

保育内容総論は「保育内容の指導法に関する科目」であり、全体目標は「幼稚園教育は園生活全体を通して総合的に指導するという指導の考え方を理解し、具体的な幼児の姿と関連づけながら、環境を構成し実践するために必要な知識・技能を身に付ける」である[4]。

(1)「幼稚園教育の基本に基づき指導の考え方の理解」の一般目標は「幼稚園教育の基本を踏まえた幼稚園における指導の考え方を理解している」とあり、到達目標は「1）幼児期の教育における見方・考え方について、具体的な事例を挙げて説明できる。」「2）遊びを通しての総合的な指導の意義と教師の役割ができる。」「3）幼稚園教育における幼児理解に基づく評価について説明できる。」「4）幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続についての説明ができる。」

(2)「発達を見通した指導計画作成の理解」の一般目標は「幼稚園教育における指導計画の考え方を理解し、幼児の発達の過程を見通した指導計画作成を理解する」であり、到達目標は、「1）幼稚園教育における指導計画の考え方について説明できる。」「2）長期の指導計画と短期の指導計画との関係について説明できる。」「3）具体的な幼児の姿から指導計画を作成する手順と配慮点について説明できる。」「4）指導計画の評価の考え方について説明できる。」「5）幼児にとっての行事の意味を理解し、園行事の在り方を説明できる。」

(3)「幼稚園における具体的な指導の理解」の一般目標は「幼児の興味や関心や発達の実情などに応じた具体的な指導の在り方を理解する」であり、到達目標は「1）幼児の実態に沿って，物や人との関わりを深める視点から教材を工夫する力をつける。」「2）保育記録を書くことを通して、幼児を理解する力を付ける。」「3）模擬保育を通して、ねらい及び内容に沿って総合的に指導する力を付ける。」

留意事項には「1）幼稚園の指導が分かる保育ビデオや写真などの視聴覚教材を活用し、できるだけ実際の姿をイメージしながら、授業に臨めるようにする。」「2）幼稚園５歳児の保育と小学校におけるスタートカリキュラムをつなげながら、発達や学びの連続性を踏まえた円滑な接続について分かりやすく講義していく。」「3）幼児教育に関わる基盤をもち、保育を構想できる人材が担当するにふさわしい。」と記されている。

考えられる授業モデルでは、実際に幼児のあそびの姿を観察すること、具体的なテーマを持って指導案を作成し模擬保育を行い、終了後は意見交換しながら保育を振り返り実践力を付けること、幼児の姿を観察、保育記録をとり、幼児理解を深めることなどが紹介されている。

２．２　保育内容総論

子どもの遊びや活動は全体としてみることが大切であり、５領域は別のものではなくてつながりあい絡み合っていることを理解する。また、幼児期の終わりごろの姿は、３歳、４歳、５歳の遊びや活動の積み重ねによってこそ子どもの育ちにつながる。教育課程や指導計画の作成においては、幼稚園教育の特徴を把握することが大切である。

一年間の園生活の流れや年間目標、クラス運営や行事に向かう期別計画や、一日の指導計画の流れや教師の役割、環境構成と保育の見通しの中で捉えることが必要である。そのためには、可能な限り具体的な事例等を通して、平成30年度「幼稚園教育要領」ねらい及び内容を具体的活動として展開していく力を身に付けることが重要である。「幼稚園教育要領」の第１章総則、第幼稚園教育の基本に書かれていることを基本として、具体的な幼児の姿と関連付けながら、環境を構成し、実践するために必要な知識や技能を身に付ける[5]。

そのためには、全ての遊びや活動、生活場目に関わる幼児の長期的な発達や幼児同士の関わりを理解する必要がある。授業としては、アクティブ・ラーニングや視覚教材を使った演習が重要な位置づけとなる。保育構想→具体的な指導案作成→模擬保育／ロールプレイ→振り返り・評価→指導案の改善という一連の流れを経験する中で、上記の内容が理解さ

「幼稚園教育要領」第 1 章第 4 節 2、3、4

2　指導計画の作成上の基本的事項
(1) 指導計画は，幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し，必要な体験を得られるようにするために，具体的に作成するものとする。
(2) 指導計画の作成に当たっては，次に示すところにより，具体的なねらい及び内容を明確に設定し，適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにするものとする。
　ア 具体的なねらい及び内容は，幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し，幼児の生活の連続性，季節の変化などを考慮して，幼児の興味や関心，発達の実情などに応じて設定すること。
　イ 環境は，具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように構成し，幼児が自らその環境に関わることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験を得られるようにすること。その際，幼児の生活する姿や発 想を大切にし，常にその環境が適切なものとなるようにすること。
　ウ 幼児の行う具体的な活動は，生活の流れの中で様々に変化するもので あることに留意し，幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること。
　その際，幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い，常に指導計画の改善を図るものとす る。
3　指導計画の作成上の留意事項
指導計画の作成に当たっては，次の事項に留意するものとする。
(1) 長期的に発達を見通した年，学期，月などにわたる長期の指導計画やこれとの関連を保ちながらより具体的な幼児の生活に即した週，日などの短期の指導計画を作成し，適切な指導が行われるようにすること。特に，週，日などの短期の指導計画については，幼児の生活のリズムに配慮し，幼児の意識や興味の連続性のある活動が相互に関連して幼稚園生活の自然な流れの中に組み込まれるようにすること。
(2) 幼児が様々な人やものとの関わりを通して，多様な体験をし，心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際，幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに，心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し，一つ一つの体験が相互に結び付き，幼稚園生活が充実するようにすること。
(3) 言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ，幼稚園生活全体を通して，幼児の発達を踏まえた言語環境を整え，言語活動の充実を図ること。
(4) 幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう，幼児の実態を踏まえながら，教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり，振り返ったりするよう工夫すること。
(5) 行事の指導に当たっては，幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え，幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお，それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し，適切なものを精選し，幼児の負担にならないようにすること。
(6) 幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ，視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には，幼稚園生活では得難い体験を補完するなど，幼児の体験との関連を考慮すること。
(7) 幼児の主体的な活動を促すためには，教師が多様な関わりをもつことが 重要であることを踏まえ，教師は，理解者，共同作業者など様々な役割を果たし，幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう，活動の場面に応 じて，適切な指導を行うようにすること。
(8) 幼児の行う活動は，個人，グループ，学級全体などで多様に展開される ものであることを踏まえ，幼稚園全体の教師による協力体制を作りながら，一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行 うようにすること。
4　幼児理解に基づいた評価の実施
　幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては，次の事項 に配慮するものとする。
(1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め，幼児一人一人のよさや 可能性などを把握し，指導の改善に生かすようにすること。その際，他の 幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
(2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い，組織的かつ計 画的な取組を推進するとともに，次年度又は小学校等にその内容が適切に 引き継がれるようにすること。

出所：「幼稚園教育要領」平成 29 年 3 月告示

れ、見つけられるように授業全体を一体的に学修していくことを構想する。そのため、授業シラバスの基本構造として、授業終了段階で全体目標が到達できるよう、モデルカリキュラムで示される３点の一般標目を中軸に内容から構成される[6]。

大方（2017）は「幼稚園教育要領」第１章第４節２指導計画作成上の基本事項的事項、３指導計画作成上の留意事項から３点について整理している[7]。

１点目は、「学生が幼稚園における指導の考え方への理解をすること。そのためには４幼児理解に基づいた評価の実施（1）（2）の部分に留意しなければならない。また、『第５特別な配慮を必要とする幼児への指導』にあるように、特別な配慮を必要とする幼児への指導について、障がいのある幼児などの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとすることを踏まえる必要がある。幼児はクラスという集団の中で生活し、影響を受けている。集団における関係性にも着目して子の育ちと集団の育ち、学級集団の中で人間関係への理解も授業に生かすことが大切である」と示している。

２点目は、「学生が幼児の発達の過程を見通した指導計画作成を理解することである。そのためには『2　指導計画の作成上の基本的事項（1）（2）』の部分に留意しなければならない。幼児理解が幼稚園教育のあらゆる営みの基本であることがシラバスの中で浮かび上がるように内容をおさえることが望ましい。幼児だけではなく、入園前の家庭の生活文化との相違などについても理解を深め、教師の役割が育まれるように授業を工夫する」と示唆している。

３点目は、学生が具体的な指導の在り方を理解することについて「平成30年度実施幼稚園教育要領前文を踏まえ、『3　指導計画作成上の留意事項（1）～（8）』に示される内容を適切に理解し、実践できるようにならなくてはならない。いずれの内容も、学生が幼児の具体的な姿をイメージできるような授業形態を工夫し、幼児の思いや心情を感じ取り、共感できるような展開、課題の発見と課題への対応を考える力を育成できるようにすることが大切である。」と記されている。

３．授業計画の構想方法

モデルカリキュラムの一般目標及び到達目標を踏まえた上で、重視するべき指導の要点や学生に修得させたい内容は以下のように解説されている[8]。

到達目標番号（1）－1）－4）について、幼児期の教育②おける見方・考え方について具体的な事例を挙げて説明できるように、遊び・活動を通じての総合的な指導の意義と教師の役割が説明できるようにする。また、保育という教育活動の中で、教師は一人一人の幼児のその場面における興味・関心を瞬時に読み取り、活動への見通しや当該幼児の発達をどのように促すかを予測するなど幼稚園教育における出発点が幼児理解であることを説明できるようにする。授業の展開としては、幼児の遊び場面を実際に視聴し、幼児はどのような活動を行っていたのかを観察する。

到達目標番号（2）－1）－4）では、幼稚園教育における指導計画の考え方について具体的な事例を説明する。具体的な幼児の姿から指導計画を作成する手順と配慮点について説明できるようにする。幼稚園生活の全体を通してねらいが総合的に達成されるよう、教育課程に係る教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織する。

自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮する。

学生自身の問題意識と関連づけながら学ぶ。幼児の姿から心情を読み取るグループワーク、教師の援助や役割、環境構成について

また、学生のロールプレイを映像として記録し、分析的に視聴することも効果的である。指導計画を立案するにあたっては、学生自身がICTを使用して情報を検索したりすることも考えられる。その際には検索した情報をそのまま指導案に活用するのではなく、子どもの実態に合わせた指導計画作成の意義について課題の工夫をする。

模擬保育の実施に向けて教材研究や環境構成についての考察も深めておくことが大切である。学生の主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、実

際の保育場目を観察・記録し、整理することや学生相互の発表によって振り返る機会となるように授業の展開を工夫する。また、支援を要する幼児や遊び・活動を楽しめていない幼児にも着目し、教師の配慮や援助について考える視点も必要である。学生同士が他者の考えを傾聴しながら、自らの視野を広げたり考えを深めたりできるよう、主体的・対話的な学びの深まりにつなげるようにする。

４．先行研究と研究方法

４．１　先行研究

模擬保育に関する先行研究では、保育者としてのアイデンティティの確立（田爪・小泉 2006）や保育実践力向上に関する効果（上村　2013）が報告されている。

田爪・小泉（2006）は、女子短期大学学生を対象とした模擬保育を行った結果、模擬保育は学生の保育者アイデンティティ確立においては一定の効果を持つことが考えられることを示した。しかし保育に対する不安が自身の保育技量に対する動機付けを低下させ、それを拡散（保育職志望と保育に対する自信が低い）させる事実があることも指摘した。田爪・小泉は、保育実践に対する基礎的認識が不十分なまま模擬保育を行うことが保育者アイデンティティの拡散を助長する可能性も考えられること。そのため、どの段階で模擬保育を行うか、学習の適時性･反復性などについて検討の必要性も示している。

中田・柳瀬・渡邊（2014）は、模擬保育を行った4年生にアンケート調査を行った結果、模擬保育は座学だけでは得られない保育者の援助や保育内容に関する気づきが得られる効果が期待されることを示した。一方、現場経験が不十分な状態では、実際の子どもの状況に即した効果は得にくいこと、初めての実習に向けての事前学習に模擬保育を用いる際にはボランティア等を通じ、直接子どもたちとかかわる等の経験があることが望ましいことも指摘している。

上月（2019）は、保育に関する基本的知識が浅く、また実習経験のない段階で、学生同士で保育者役・子ども役になっての模擬保育を行う場合は、模擬保育の目標設定の置き方、模擬保育の準備・状況づくり、模擬保育後の振り返りなどに関する、工夫や実施する科目で求められる目標とも合わせて十分に検討する必要性を示唆している。

４．２　研究方法

本研究では、上月（2019）の模擬保育課題を参考に模擬保育を行った。上月（2019）は2回の模擬保育「2歳児クラス」対象「造形遊び」と「4歳児クラス」対象「運動遊び」を主活動として課題設定した。指導案はグループごとに立案し、最も楽しく展開されるだろう指導案を投票形式で選び、選ばれた指導案を作成したグループが保育者役として、実際に模擬保育を実践し、最後に振り返りを行っていた。

本研究は上月（2019）の模擬保育課題[9]（表1 2歳児クラスと4歳児クラス）を利用し、グループごとに2歳児か4歳児どちらかの活動に関する指導案を立案し、全てのグループが作成した模擬保育を行った。上月は投票形式で最も楽しく展開される指導案を選び、実践していたが、本研究では作成した全グループ指導案の模擬保育を行った。

本研究では、朝の会では朝のあいさつ、出席確認、手遊び、歌、絵本読み等を加えてよいことも伝えた。模擬保育は、主活動20～30分、朝の会10～20分、合わせて35～50分の範囲内でできることを条件とした。

上月（2019）は模擬保育を行った後は、残った時間で振り返りシートを記入・提出させていた（授業内で振り返りシートが提出できない場合は翌週提出）。振り返りシートはB5サイズ用紙1枚（自由記述）で、模擬保育を振り返り、1. 良かった点、2. 反省点、3. 気になった点、4. 考察を記述させ、振り返りシートは、次週の授業「模擬保育の振り返りと評価」（全体での討議・省察）までに学生に返却し全体での振り返りを行っていた[10]。上月（2019）によると、いろいろな立場からの気づきを交流するが、特に模擬保育がうまくいかなかったときに、保育者役が過剰に落ち込まないよう良かった点を必ず押さえるようにすることと、保育者役をした学生が一番どうしていいかわからなかったことを優先的に振り返りのテーマのひとつに設定し、クラス全体で次への課題・改善を考えるよう努めたこと、必要に応じて、教員が模擬保育中に撮影したビデオを用いて討議を行ったという。また、初めての模擬保育時は、受講者全員の保育者役経験を重視して、15回

表１　模擬保育の主活動を考えるに当たっての課題

模擬保育①「4歳児クラス（きりん組）の子どもの様子と主活動テーマ」

4歳児クラスになって身体をたくさん動かして活発に遊ぶ姿が見られるようになってきたきりん組の子どもたち。最近では、先生と一緒に仲良しの友達が集まって、数名ずつですが、「丸鬼」や「長なわ跳び」「まりつき」をして楽しんでいます。8月X日の「設定遊び」では、クラスのみんなで身体を動かして楽しめる遊びを考えたいと思います。しかし、けんと君、りょうま君は、お部屋で「ブロック遊び」（よくロボットや乗り物を作っている）をすることが 多く、かすみちゃん、すずちゃんも「ままごと遊び」（お母さんごっこ、レストランごっこ、お料理を作ったりしている）をすることが多く、あまり身体を動かして遊ぼうとしたがりません。この子たちも一緒に、身体を動かして遊びたくなる遊び、援助を考えてください。また、子どもたちはみんな絵本が大好きで、最近「おばけ」が出てくるも のに興味を持っています。

子どもの人数は20名、保育者は3名体制で模擬保育の指導案。

模擬保育②「2歳児クラス（うさぎ組）の子どもの様子と主活動テーマ」

2歳児クラスになってから親しんでいるクレパスを、この頃は自由遊びの時間によく引き出しから出してきて、なぐり描きをして楽しんでいる子どもたち。8月X日の「設定遊び」では、クレパスを使って楽しめる簡単な「造形遊び」を考えたいと思います。最近は、のりやはさみも少しですが経験するようになってきたので、それらも用いても構いません。できれば出来上がった作品で夏らしい壁面装飾にできればと考えています。

子どもの人数は20名、保育者は4名体制。

出所：上月（2019）「保育内容総論における模擬保育と学生の学び」18頁。

の授業内10回を模擬保育に当てたものの、振り返り時間が十分に持てず、実践の省察が未消化に終わったため、学生全員が保育者役を経験することより、模擬保育を終えての振り返りに十分な時間を確保することを優先したことも紹介されていた。

５．模擬保育

５．１　模擬保育

2021年6～7月関東地方の4年制大学において、2年生の保育内容総論の授業時に、上月（2019）の模擬保育テーマを提示し、グループごとに2歳か4歳の模擬保育指導案を作成し、指導案に沿って実際に模擬保育を行った。コロナ禍で入学後半年間は全て遠隔授業の後、後期も遠隔授業が多く、園見学の経験がないまま保育現場体験ができず1年間を過ごした学生には、保育所や幼稚園の動画などを紹介することで子どもの発達などを理解できるように心掛けた。実際の子どもの様子を理解できないまま模擬保育を行うことに課題はあったものの、保育者を目指す学生にとって大学入学後初めて保育者養成校での学びを実感ができると多くの学生が模擬保育体験を楽しみにしていた。模擬保育では製作活動が多く、主活動、ねらいと内容は表2の通りである。

５．２　模擬保育の振り返り

模擬保育は時間の制約などがあったが、座学だけではなく自分たちで実際に保育者役を体験し、保育者の言葉がけが子ども役の学生にどのように伝わるかなど、実際の保育に携わる前に様々なことを考えるよい機会になったようである。

本研究は上月（2019）の振り返りシートと同様に1. 良かった点、2. 反省点、3. 気になった点、4. 考察を自由記述で記入提出してもらった。振り返りシートの考察[11]から記述が多く、学びがあったと考えられる内容は以下の5項目、（「子どもの学び」、「模擬保育を行う準備」、「安全面や保育者間の打ち合わせ」、「保育者の援助や言葉かけ」、「保育者役としての考察」）であった。

1）子どもの学びについて：「夏に関連するものの製作をしたことでより季節に興味や関心をもてるようになるのではと考えた」「製作を通して海の生き物

表 2　模擬保育主活動、ねらいと内容

年齢	主活動	ねらい	内容
2	くらげ作り	生活の中で様々な形、色、手触り、動きなどに木津足り感じたりして楽む。 保育士からの話や生活や遊びの中での出来事を通してイメージを豊かにする	クラゲ作りを通して、生き物に興味を持ち、素材を楽しみながら制作を行う
2	海の仲間達を作ろう	様々な道具を使うことにより指先の発達を促す。自分で色や素材を洗濯することで制作活動の楽しさを知る。	海の生き物に関心を持ち、画用紙でオリジナルの家たちを楽しみながら制作を行う
2	海にいる生き物づくり	季節に関心をもって活動を楽しむ。 様々な素材に触れ、自分で工夫して作ってみようとする	制作（魚づくり）歌（うみ）手遊び（さかながはねて）
2	クラゲづくり	生活の中で様々な形・色・手触り、動きなどに気付いたりして楽しむ。保育士から話しや生活や遊びの中での出来事を通してイメージを豊かにする	クラゲ作りを通して、生き物に興味を持ち、素材を楽しみながら制作を行う
4	おばけ落とし	友だちと身体を動かして遊ぶ楽しみを味わう	ルールを理解しておばけ落としを行う
4	おばけのダンス	観じたことや考えたことなどを自分なりに表現して楽しむ	音楽に親しみ、歌を歌ったりする楽しさを味わう
4	おばけメダルづくり、フルーツバスケット	自分の身体を十分に動かし、進んで運動しようとする。保育所の生活を楽しみ、自分の肩等で行動することの充実感を味わう	工作を通して貼る、描く、のおもしろさを知り、自作したものを使用して遊ぶことを楽しむ
4	うちわ作り、手形壁面装飾	風物詩に関心を持って楽しむ	うちわ作りを通して夏という季節を感じ、楽しみながら制作を行う
4	アイスクリーム 壁画制作	季節を感じながら制作活動を楽しむ。 様々な素材屋道具に触れ、想像し、それを表現する	季節や色に関心を持ち、アイスクリーム制作を楽しむ
4	お面づくりとおにごっこ	友だちと身体を使って遊ぶ活動を通して楽しむ。制作を通して子どもの興味をより深める	おばけについて関心をもち、おばけのお面づくりを楽しみながら行う。役になりきって体を動かす。
4	おばけごっこをしながらおばけ同士撃退していった	子どもたちの自由な発想を引き出し、友だちと協力する大切さを味わいながら自発的に活動する	的当てを通して体を動かす
4	自分だけのアイスクリームをつくる	四季の食べ物に関心をもって制作を行う	色彩に興味をもちながら世界にひとつだけのアイスクリーム作りを行う

に興味や関心がもてるようになると考えた」「製作を通してクレパスやシールや絵の具など、様々な身近なものと触れ合うことができることは子どもにとって良い経験になると考えた」「のりに親しむ姿がみられてきた子どもたちにとって、のりを使って折り紙を貼ったり、アイスとコーンをつなげてアイクリームができあがる活動はとても楽しいのではないか。自分でアイスに色を塗るだけでなく、様々な色の折り紙によっても色への関心が高まることが期待されると感じた」「全員が平等に楽しく遊べるゲームでとても良かったと思う。また、輪になってのゲームでみんなの表情がとても見やすくよかった」「クラス全員が楽しめて、最後にみんなの作品を見ることができたので、その面でも楽しめると感じた。最初の準備が大切だと思った。」などである。

2）模擬保育を行う準備：「子どもがワクワクできるような製作ができるよう、あらかじめ用意が必要だと考える。」「子どもたちがルールを理解するには少し時間がかかると思う。そのためには、事前の準備、分かりやすい説明が必要不可欠だと考えた。」「活動をしていてとても楽しかった。準備物も事前にしっかり用意されていて、スムーズに活動を始めることができていたため、とてもよいと感じた。また、のりやクレパスで手が汚れてしまうことを想定し、ウェットティッシュ（指導案ではぬれたタオル）を用意しておくという考えは同じクレパスを使って製作を行った私の頭には無かったため、配慮されていることに素晴らしいと思った。」などが記されていた。

3）安全面や保育者間の打ち合わせ：「テーマやねらいなどを考えて作ることは必要だが、身体を動かす活動を行うときは安全面をよく考えて計画する必要がある。」「保育者間での役割分担をしておくことがスムーズな保育につながっていくと考える」「保育者があらかじめ分担をすることが効率的に活動を進められるのだと考える。」などが記述されていた。

4）保育者の援助や言葉かけ：「全ての子どもに伝えるような言い回しをし、説明するという力が保育者には必要だと考える。作業が苦手な子どもに「頑張ればできる」という状態を作ってあげることが重要だと考える。」「子どもたちが集中できるための時間配分や説明を聞く時と活動する時のメリハリの付け方に注意することがよりよい保育につながっていくのではないかと考える」などである。

5）保育者役としての考察：「全体的に準備不足、情報共有の不足という言葉が当てはまると感じた。時間がなく、急がなくてはならいない状況下にいたということもあるが、もっとスムーズにできたのではないかと思う点が多くあった。完成した花火の紙皿飾りはきれいで、保育者のすごさを改めて感じた」、「全体的にしっかりと準備をし、模擬保育を行うことができたと思う。自分たちなりに模擬保育を行う中で、どんな問題が起こるのか考えながら準備をしていたのだが、実際に模擬保育を行ってみると、想定外の問題も起きてしまった。そのため、もう少し念入りに準備をする必要があった」などが記述されていた。

学生なりに準備をしても、想定外の問題が起きて、改めて準備が不足していたこと、子どもへの言葉がけや安全面への気付きなど、現場で必要と思われることが模擬保育から学ぶことができた様子がうかがえた。

６．まとめ

教職課程コアカリキュラムに位置づいている保育内容の指導法の一般目標「幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける」ための到達目標の１つとして「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」ことが求められる。保育内容総論は「保育内容の指導法に関する科目」であり、全体目標「幼稚園教育は園生活全体を通して総合的に指導するという指導の考え方を理解し、具体的な幼児の姿と関連づけながら、環境を構成し実践するために必要な知識・技能を身に付ける」である。⑶「幼稚園における具体的な指導の理解」一般目標は「幼児の興味や関心や発達の実情などに応じた具体的な指導の在り方を理解する」であり、到達目標は「1）幼児の実態に沿って , 物や人との関わりを深める視点から教材を工夫する力をつける。」「3）模擬保を通して、ねらい及び内容に沿って総合的に指導する力を付ける。」がある。

大学入学時コロナ禍で対面授業が制限され、保育現場の見学などができなかった保育者養成校の２年生を対象に少しずつ対面授業が実現した 2021 年 6

～７月に模擬保育を行った。本研究では保育内容総論の模擬保育からの学びを振り返りシートに記述してもらった結果から今後の授業ついて検討を行った。

振り返りシートの内容から指導案を作成し、作成した指導案をもとに模擬保育を行う体験は実習前には様々なことに気付くことができたと考えられる。使用できる教室などの制約があったものの、環境構成や安全面に関する気付きは実際の実習でさらに深く学ぶことができると予想される。振り返りシート全体を通して保育者役、子ども役の両方を経験した学生から、保育について重要な発達課題、子どもの予想される姿、ねらいや内容などに関する記述が少なかった点は今後の課題として検討する必要がある。

今回の振り返りシートから総合的に指導する力を付けることの難しさを学んでいる様子はうかがえた。しかし、「幼児の実態に沿って、物や人との関わりを深める視点・教材を工夫する力」と「ねらい及び内容に沿って総合的に指導する力をつける」ことは保育内容総論だけではなく、様々な授業を通して理解を深めることができるように連携する必要もある。

ねらい及び内容に沿って総合的な指導ができるよう、他授業担当者との連携を図りながら、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の理解を深められるように指導していくことも今後の課題である。

＜注＞

（１）無藤隆代表, 保育教諭養成課程研究会編 2017,『幼稚園教諭養成課程をどう構成するかモデルカリキュラムに基づく提案』萌文書林, 10-11 頁。

（２）無藤　前掲書　22 頁。

（３）無藤　前掲書　21 頁。

（４）領域及び保育内容の指導法に関する科目（3.「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」の教職課程コアカリキュラムとモデルカリキュラム　後半）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm

（５）無藤　前掲書　83 頁。

（６）無藤　前掲書　83 頁。

（７）無藤　前掲書　83-84 頁。

（８）無藤　前掲書　84-85 頁。

（９）上月（2019）「保育内容総論における模擬保育と学生の学び」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』(1), 18 頁。

（10）上月　前掲書　20 頁。

（11）振り返りシート回収時に趣旨を説明し、研究で使用する許可を得た。

＜引用・参考文献＞

上月智晴　2019「保育内容総論における模擬保育と学生の学び」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』(1), 15-27 頁。

文部科学省　中央教育審議会 2012「2 これからの教員に求められる資質能力」『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm

文部科学省　2017「中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ」『「新しい学習指導要領の考え方』

文部科学省　2017「2 幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められること」『幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm

文部科学省　2017 「幼稚園教育要領」平成 29 年 3 月告示
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019.htm

無藤隆代表 , 保育教諭養成課程研究会編　2017,『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか　モデルカリキュラムに基づく提案』萌文書林

田爪宏二・小泉裕子　2006 保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討：模擬保育の実践を通して、鎌倉女子大学研究紀要 13 号 27-38 頁。

上村晶 2013「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察（2）」『高田短期大学紀要』(31), 79-88 頁。